

カキ「東京紅」における葉果比が果実品質および翌年の着果量に及ぼす影響

池田行謙・河野 章
(園芸技術科)

【要 約】カキ「東京紅」は、収量、果実品質および連年安定生産のために、7月上旬の摘果時の葉果比を20～30に設定するのがよい。

【目 的】

カキ「東京紅」の着果量と収量および果実品質の関係については、これまで明確にされておらず、生産者は経験や他品種での例を参考にして摘蕾および摘果を行っている。そこで本試験では、カキ「東京紅」の適正着果量を明らかにし、結実管理の基礎資料とする。

【方 法】

灰色低地土圃場に3.5m×3.5mの間隔で植栽された「東京紅」30年生2樹および8年生2樹の合計4樹を供試し、2011年7月4日に葉果比（1果あたり葉数）が10、20、30および40となるように摘果した。試験は、着葉数700枚程度の垂主枝を単位とした枝別処理で行い、1区1垂主枝4反復とした。収穫は、2011年10月28日より果頂部の果皮色がカラーチャート値7.5以上で順次行い、収穫果はただちに果実品質調査に供した。食味調査は、調査者2名により行い、甘味、肉質、渋み、食感などから3段階（良好、普通、不良）で評価した。また、翌年の着果量調査は、2012年5月17日（雌花数）および2012年7月6日（着果数）に行った。なお、7月中旬以降の後期落果は確認されなかった。

【成果の概要】

1. 果実品質：1果平均重は、処理区間で明らかな差は認められなかったが、葉果比10区においてL階級基準の250gを下回った。果径指数は、処理区間での差が判然としなかった。硬度は、葉果比10区で低く、葉果比30区で高かったが、これらはいずれも食味で問題となる差ではなかった。糖度は、葉果比10区が16.0%と最も低く、葉果比20、30および40区は、16.8～17.2%と葉果比10区と比べて約1%高かった。食味は、葉果比20、30および40区で優れたが、葉果比10区では香り、旨味、甘味の点で劣り、「不良」と評価した。果頂裂果およびへたすきは、葉果比40区において発生が少ない傾向であった。これは、葉果比40区は他区と比べて摘果量が増すことで、望ましくない部位に着果する幼果や外観に劣る幼果の残存量が減少することが主な原因と考えられた(表1)。
2. 翌年の着花および着果量は、処理区間での差は判然としなかったが、いずれの処理区も翌年の葉果比が20以上となり、葉果比10区および20区については、前年と同じ着果量を目指した葉果比の設定が困難となることが推測された(表2)。
3. まとめ：カキ「東京紅」の着果量について、葉果比を10に設定すると果実肥大および食味が劣り、葉果比を40に設定すると外観品質は優れるが葉果比20および30と比べて着果量が25%～50%少ないことから収量性が低くなることが懸念される。従って、収量、品質および連年安定生産のためには、葉果比を20～30に設定するのが適当と考えられた。

表1 カキ「東京紅」の着果量が果実品質および収量に及ぼす影響

処理区 (葉果比)	1果平均重 (g)	果径 指数 ^a	硬度 (kg)	糖度 (Brix%)	食味 評価	果頂裂果 指数 ^b	へたすき 指数 ^b
10	247.6	135.7	1.61	16.0	不良	32.8	16.3
20	253.4	135.4	1.74	16.9	良好	28.0	16.3
30	258.8	135.7	1.77	16.8	良好	33.8	14.3
40	255.0	137.0	1.71	17.2	良好	12.4	9.8

a) 横径／縦径×100

b) 発生程度を「無，微，中，甚」の4段階で評価し，（微×1＋中×2＋甚×3）／（調査果数×3）×100により算出。

表2 カキ「東京紅」の着果量が翌年の着花量および着果量に及ぼす影響

処理区 (葉果比)	葉花比	葉果比
10	10.3	21.7
20	13.3	27.7
30	12.2	27.9
40	16.5	35.9

着花量調査：2012年5月17日

着果量調査：2012年7月6日